Title	H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるトムのキリスト教について
Author(s)	森田, 美千代
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.57, 2014.3 : 147-179
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5097
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』における
トムのキリスト教について

森田　美千代

I　はじめに

本稿の目的は、H・B・ストウ（Harriet Beecher Stowe, 1811–96）によって一八五二年に書かれた『アンクル・トムの小屋（*Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly*）』において、主人公とみなされているトムが、どのようなキリスト者として描かれているかを、テキストにできるだけ忠実にみていくこと、そしてその作業を通して、トムのキリスト教の特徴を抽出すること、である。その目的のために、はじめに、ストウが『アンクル・トムの小屋』を書こうと思った契機と動機は一八五〇年の逃亡奴隷法の成立であったこと、ストウは奴隷制の悪を彼女のもっとも強みとするキリスト教で描いたのではないかといえること、アフリカ人に対して「同情と［思いやりの］感情（sympathy and feeling）」をアメリカ人がもつことを『アンクル・トムの小屋』の目的とするとストウが言っていること、ストウは『アンクル・トムの小屋』を「北部の、男性・女性（特に母親）・キリスト教徒たち・キリスト教会」に向かって書いていることを、

本稿目的の「背景」として明らかにしておきたい。

一八五〇年、アメリカで「逃亡奴隷法（the Fugitive Slave Law）」が成立した。正確には、「第二次逃亡奴隷法」である。「第一次逃亡奴隷法」は一七九三年に成立され、同法によって逃亡奴隷を援助する者は罰金を科せられた。「第二次逃亡奴隷法」は一八五〇年に成立され、その目的は奴隷主の財産保護であった。具体的には、逃亡奴隷を追跡する権限や逃亡奴隷を連れ帰る権限を奴隷主に与え、また逃亡奴隷を援助する者の刑罰を（第一次逃亡奴隷法よりもさらに）重くした[1]。

ストウが『アンクル・トムの小屋』を書こうと思った契機と動機の一つは、一八五〇年の第二次逃亡奴隷法の成立であった。ストウは、次のように、記している。

> 一八五〇年の逃亡奴隷法以来、キリスト教徒で人間らしさももち合わせた人々が、善良な市民の義務として、実際に逃亡奴隷をもとの隷属状態に戻すのを奨励していると聞いたとき、また北部の自由州に住む親切で思いやりのある立派な人々が、この問題との関連で、何がキリスト教徒の努めであるかとわざわざ考えたり、議論したりするのをあちらこちらで聞いたりしたとき、驚きと戸惑いのあまり、作者はただただ次のように考えざるをえなかった。こういった人々やキリスト教徒は、奴隷制がどのようなものかを分かっていないのではないか。もし分かっていたら、そもそもこういう問題を議論するなどということはありようがないではないか。こうした思いが高じていったとき、生きた劇的リアリティによって、奴隷制を表現したいという欲求が起こってきた（三八三、五一九）[2]。

ストウはまた、一八五〇年一二月に、兄エドワード・ビーチャーの妻にあてて、次のように記している。

奴隷法（the slave law）は、私には信じられないこと、驚くべきこと、悲しむべきことである。もしもこの罪と不幸を海底深く沈ませることができるなら、私も喜んで共に沈んでいきたいと思う。（中略）父がボストンに来て、逃亡奴隷法（the Fugitive Slave Law）について説教してくれればよいのにと思う。昔、私が幼かったとき、リッチフィールドで、父は奴隷売買（slave trade）について説教したのだが、あのときのように。[3]

ここで、次のことを確認しておきたい。ジョシュア・ベリン（Joshua D. Bellin）が、“Up to Heaven's Gate, Down in Earth's Dust: The Politics of Judgment in *Uncle Tom's Cabin*”において、『アンクル・トムの小屋』は、神がストウをしてこの小説を書かしめたということと、ストウ自身の欲求によって奴隷制の小説を書いたということとの間に、葛藤（conflict）があり、『アンクル・トムの小屋』は、その両者を行きつ戻りつしていると、指摘している。しかし、この指摘は、的を射ているだろうか。『アンクル・トムの小屋』の著作権を神に帰すことと、ストウ自身の欲求によって奴隷制の小説を書いたとみなすこととの間には、矛盾はない、と筆者は思っている。[4]

ストウは奴隷制の悪をキリスト教と関連させることによって抉り出そうとしたと、筆者は考えている。ストウの『アンクル・トムの小屋』は、奴隷制とキリスト教とを関連づけて読まなければ、読んだことにならないのではないかと考えている。多くのストウ研究者――特に日本人のストウ研究者――は、キリスト教と奴隷制の悪を結び付けて考えることに消極的ではなかったか、と筆者は思っている。そういうなかで、これまで、ジェイン・P・トンプキンズ（Jane P. Tompkins）や小林憲二などが、『アンクル・トムの小屋』を、奴隷制とキリスト教を結び付けて理解したことを、筆者は高く評価するものである。しかし、問題は、奴隷制とキリスト教をどのように関連づけるかである。トンプキンズ

は、次のように言っている。「この小説［『アンクル・トムの小屋』］」は、（中略）聖書を黒人奴隷の物語として書き直している。（中略）『アンクル・トムの小屋』は、われわれの文化の中心的な宗教的神話、すなわちキリストの磔刑物語（the story of the crucifixion）を、アメリカ最大の政治的抗争――奴隷制――と、アメリカでもっとも尊重されてきた社会的信念――母や家庭の神聖さ――という二つの見地から語り直したものである」[5]。また、小林は、トンプキンズの主張をもとにして、次のように述べている。「ストウがこの作品［『アンクル・トムの小屋』］を通して行なおうとしていることは、『黒人奴隷のストーリー』という形で、『聖書の書き直し』をすることであった。（中略）『アンクル・トムの小屋』という作品は、（中略）西洋文化の中心に位置する宗教神話としての『キリスト磔刑の物語』を、奴隷制というアメリカ政治の最重要問題に即して語り直しているということが強調されなければならない」[6]。トンプキンズも小林も、『アンクル・トムの小屋』においてストウが試みたものは、奴隷制を借りて、聖書を語り直しているのだということにおいて、共通している。しかし、筆者は、その逆ではないかと考えている。すなわち、奴隷制の悪を、ストウのもっとも強みとするキリスト教で[7]、描いたのではないかと考えている。

ストウは、『アンクル・トムの小屋』の目的を、次のように記している。

> この作品の目的は、われわれのあいだで生活しているアフリカ人に対して、［アメリカ人の］同情と［思いやりの］感情（sympathy and feeling）とを喚起することである。そして彼ら［アフリカ人］が、ある一つの制度（system）の下でいかに不当な取扱いを受け、いかに嘆き悲しんでいるかを示すことである。その制度とは、彼らに好意をよせる人々が、彼らのために企てたあらゆる事柄の結果がどんなにすばらしいものであっても、この制度の下にあってはそのすべてのものをくつがえし、無にしてしまうほど必然的に残酷で

不正な（cruel and unjust）制度なのである（xiii、山屋・大久保訳四）。

ここで注意すべきことは、アメリカ人が、アフリカ人に対して「同情と［思いやりの］感情」をもつことを、『アンクル・トムの小屋』の目的とすると、ストウが言っていることである。『アンクル・トムの小屋』の目的は、ただちに奴隷制度反対であるとは、ストウは言っていないことである。アメリカ人の「同情と［思いやりの］感情」という、一見したところ頼りない印象を与えかねない回路を経由して、奴隷制を廃止しようと、ストウが思っていることである。

ストウは、『アンクル・トムの小屋』の小説を、誰に向かって書いたのか。第四五章の最終章の最後のところで、ストウは、「北部も南部も、神の前では、ともに有罪である（guilty）」（三八三、五二五）と述べているように、北部と南部のいずれにも向かって書いていることは、確かである。そのことを、少しく詳細に、そして少しく具体的にみておきたい。

ストウは、まず、「寛大で気高い心をもっている、南部の、男性と女性（men and women, of the South）」に向かって、語りかけたいと言う。「この忌まわしい制度［奴隷制度］には、この作品［『アンクル・トムの小屋』］のなかで漠然と表現されているか、あるいはなんらかの形でほのめかされるもの以上の悲惨さや悪行が、現実に存在すると感じたことはないだろうか？」（三八三、五一九）と言い、また奴隷を売買する奴隷貿易についての悲劇も、「まだ書かれたり、話されたり、想像されたりできないままである」（三八四、五二〇）と言う。

次に、ストウは、「アメリカの男性と女性（men and women of America）」に語りかける。具体的には、マサチューセッツ、ニューハンプシャー、ヴァーモント、コネティカット、メイン、ニューヨーク、オハイオ、大草原の諸州などに住む男性と女性に語りかける（三八四、五二〇）。

「アメリカの母親たち（mothers of America）」にも語りかけている。ストウは、「黒人の母親に心からの同情を寄せていただきたい（pity）！」とお願いしている（三八四、五二〇）。

「自由州の、人々や母親たち（the people and the mothers, of the free states）」にも語りかけている（三八四、五二一）。ストウは、さらに、「北部の、男性・母親・キリスト教徒たち（Northern men, northern mothers, northern Christians）」、「北部の、キリスト教徒の男性と女性（Christian men and women, of the North）」に語りかける（三八五、五二一）。ストウは、ここで二つのことをお願いしている。まず、正しく感じ（feel right）、同情を寄せるということでの影響力（sympathetic influence）をもってほしいとお願いしている。次に、祈って（pray）ほしいとお願いしている（三八五、五二一）[8]。

最後にストウは、「キリストの教会（Church of Christ）」と、「キリスト教徒たち（Christians）」に、語っている（三八八、五二五）。アメリカが救われるのは、悔い改めと正義と神の憐れみ（repentance, justice and mercy）による。そのことに、キリストの教会とキリスト教徒たちは、全身全霊で尽くしてほしいと、ストウは願っている。

以上をみると、予想に反して、ストウは、奴隷制度の下にある南部を難詰してはいない。このことは、意外なことである。ストウは、主として北部の人々に向かって、『アンクル・トムの小屋』を書いているといえる。具体的には、北部の、男性・女性（特に母親）・キリスト教徒たち・キリスト教会に向かって書いているといえる[9]。そのことは、先に述べた、『アンクル・トムの小屋』を書こうと思ったストウの契機と動機からも、いえることである。

II 『アンクル・トムの小屋』において、トムはどのようなキリスト者として描かれているか

アンクル・トムは、その生涯、三人の白人所有者によって、その所有物となった。最初はケンタッキー州のアーサー・シェルビーによって、次はルイジアナ州のオーガスティン・セント・クレアによって、最後はルイジアナ州内でミシシッピー川に流入しているレッド川の湿地帯で綿の大農園を経営するサイモン・レグリーによって、である。

1 シェルビー農園でのトム

第一章において、トムは、キャンプ・ミーティング（camp-meeting）で信仰をもったと、農園主のシェルビーによって、紹介されている（二、一三）。

教会から遠く離れている一九世紀のフロンティアでは、野外でキリスト教集会（主としてキリスト教伝道集会）が開かれた。これを、キャンプ・ミーティングという。キャンプ・ミーティングには、家族ぐるみで多くの人たちが集まった。彼らはキャンプサイトのあちらこちらで複数の説教者たちによって同時にしかも日夜続けられる説教を聞いた。説教は、教育を受けていない人たちにもわかる言葉で語られた。彼らは、説教を聞くのみならず、祈り、歌った。集会は、約一週間続くことが多かった。フロンティアでのキャンプ・ミーティングに力を注いだのは、バプテスト派とメソジスト派であった。そのことによって、両教派は、一九世紀に教勢を伸ばした。(10)

次にトムが出てくるのは、第四章である。章のタイトルは、「アンクル・トムの小屋のある夕べ（An Evening in Uncle Tom's Cabin）」である。その夕べは、アンクル・トムの小屋で、集会（meeting）があることになっていた。集会は、週一回、時間の制限などなく、開かれていた。その夕べ、八〇歳の老人から一五歳の少年少女まで、集まっていた。

その集会は、次のような順序で進行した。

交わり

歌（singing）　この歌は、教会（church）でよく歌われる讃美歌（hymns）とキャンプ・ミーティングで歌われる歌の両者が含まれていた。後者の歌には、「ヨルダン川の岸辺（Jordan's banks）」、「カナンの約束の地（Canaan's fields）」、「新しきエルサレム（New Jerusalem）」の歌詞がよく出てきた。

聖書朗読　農園主シェルビーの息子であるジョージが、黙示録（Revelation）の最後の幾章かを読んだ。

キリストの教え（Exhortations）　トムによってなされた。トムによってなされる一種の説教は、簡素で、心のこもった、真摯な（simple, hearty, and sincere）ものである。そのように、トムの説教は優れていたが、特に優れていたのは、彼の祈り（prayer）であった。

経験の談話　（信仰の証し）

以上をみれば、この集会は、当時、日没から夜明けまで「見えざる教会」として黒人奴隷たちが礼拝をおこなってい

た集会とはおおいに異なっていることである。[11] この集会は、白人たちが教会でおこなう礼拝と、黒人たちがキャンプ・ミーティングでおこなうやり方の両方が、取り入れられているものであったと、いえる。具体的には、教会での賛美歌とキャンプ・ミーティングでの歌の両者が歌われていることや、黒人奴隷たちだけが参加しているのではなく、黒人奴隷所有者の息子である白人のジョージも参加していることなどである。とはいえ、キャンプ・ミーティングでの歌のなかから、「天の故郷」をあこがれる歌が選ばれていることや、聖書朗読として黙示録が選ばれていることや、トムの祈りが優れていたことが言及されていることなどからすれば、ここには、ストウのキリスト教の特徴と『アンクル・トムの小屋』のもつキリスト教の特徴――それはトムのキリスト教の特徴であるともいえる――が色濃くあらわれているといえるだろう。

第五章の最後のところで、トムは自分が奴隷商人に売られたことを、エライザによって知らされる。エライザとその息子ハリーはカナダに逃亡しようとしているが、トムは、エライザ親子の逃亡には賛成するが、自分は留まって、売られていくことを選ぶ。

第七章においては、動揺している妻クロウに対して、トムは、「敵のためにも祈れ」と聖書には書いてあるではないかと、言う。加えて、トムは、次のように言う。敵のために祈れないことは自然（nature）であり、そして自然は強いが、主の恵み（Lord's grace）は自然よりももっと強い、と。

第一〇章では、トムが売られていく朝、声をあげて泣き崩れるクロウに向かって、トムは、深南部にだってケンタッキーと同じ神がおられ、自分は主の御手（Lord's hands）のなかにいると言う。そして、売られていくのが、他の誰でもなく、自分であることを、主に感謝すると言う。ここには、黒人奴隷たちを含めたシェルビー農園の崩壊を防ぐために、自ら犠牲になるトムの決意がうかがえる。[12]

第一二章では、トムは、奴隷商人ヘイリーの馬車に乗せられている時に、「わたしたちはこの地上に永続する都を

もっておらず、来るべき都を探し求めているのです。それゆえ、わたしたちの神と呼ばれることを、神ご自身は恥じないのです。というのも、神はわたしたちのために都を用意なさったからです[13]」という聖書の言葉に、思いをはせていた。

ここにも、トムのキリスト教の特徴があらわれているといえよう。どちらかといえば、トムは、この世に執着するよりは、「天の故郷」にあこがれているということがいえる。しかし、このことは、この世のこと（奴隷制のこと）はどうでもよいとトムが思っていることではない。天の故郷があるという相の下では、この世の奴隷制は絶対化されないということなのである。

2　セント・クレア家でのトム

第一四章では、ヘイリー監督のもとに、トムは今、ミシシッピー川を下っている。船では、聖書を読み、その聖書が与えている約束の言葉を読みとろうとした。たとえば、「心を騒がせるな。わたしの父の家には住むところがたくさんある。あなたがたのために場所を用意しに行く[14]」などである。第一二章と同じように、ここでも、トムのキリスト教は、「天の故郷」にあこがれているという特徴をもっているといえよう。

その船で、トムは、エヴァンジェリン・セント・クレア（通称エヴァ）という、五、六歳になる天使のような少女に出会う。その出会いは、トムが、エヴァの名前を聞くことで始まった（一二七、一八〇）。その直後、エヴァがミシシッピー川に落ち、トムが川に飛び込んで、エヴァを助けた。そのことがきっかけとなり、エヴァが父のオーガスティンにトムを買ってほしいとたのむ。奴隷商人ヘイリーは、トムを売るに際して、トムのことを、祈りの人間（praying creature）であり、ケンタッキーではみんなから説教師（preacher）[15]と呼ばれていたと言って、少しでも高く売ろうと

した。ここで、トムは、セント・クレア家所有の奴隷になった。

次にトムが登場するのは、第一六章の最後の部分である。ここでトムは、「新しきエルサレム（New Jerusalem）」、「輝かしき天使（bright angels）」、「カナンの地（land of Canaan）」などを歌う。これらの歌は、第四章のアンクル・トムの小屋での集会で歌われたものとほとんど同じ歌である。今後、トムがエヴァのために歌を歌い、エヴァはトムのために聖書を読んであげ、トムがその意味をエヴァのために説明することを、お互いに約束する。

オーガスティンがここで、トムの祈りについて次のごとく言及している。トムは、自分（オーガスティン）のためにも祈ってくれており、特にオーガスティンが回心する（convert）ように祈ってくれている、と。

第一八章の冒頭で、トムは、自らを、エジプトにおけるヨセフの運命と似ていると、認識している。トムは、自らをモーセの運命と重ね合わせてはいない。もしトムが自らをモーセの運命と重ね合わせていたならば、『アンクル・トムの小屋』の小説は、まったく違ったストーリーと性格のものになっていたであろう。

第一九章では、馬小屋の上にある屋根裏部屋が、トムの部屋であり、その部屋の机には、トムの聖書と讃美歌が置かれていたと、記されている。

第二二章では、まず二年の歳月がトムに流れていったことが明らかにされている。トムは、自らを、「自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えた」[16]人間と、みなしている。

エヴァは、最初、トムを喜ばせるために、聖書を読んでいたが、すぐに、彼女自身聖書に魅せられていった。彼女が最も気に入ったのは、黙示録と預言書（the Revelation and the Prophecies）であった。[17]

エヴァは、「わたしはまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た」[18]という一節を声に出して読んだ。それに続いて、トムが霊歌（spiritual）を歌い出した。「ああ、もし私に朝の翼があるならば、カナンの岸まで飛ぶだろう。輝ける天使が私を故郷へ運ぶだろう。新しきエルサレムの地へ」。ここでも、トムは、「天の故郷へのあこがれ」を示す霊

歌を歌っている。エヴァは、トムに、「輝かしき精霊（spirits bright）」について歌ってほしいとたのむ。トムは、よく知られているメソジストの賛美歌（Methodist hymn）を歌った。「私は見る、一団の輝かしき精霊を。天上にて栄光を糧となし、汚れなき白き衣を身にまとい、勝利の棕櫚を捧げ持つもの」[19]。

第二六章で、エヴァは死ぬ。エヴァが死ぬ直前、トムは、二人が好きだった賛美歌を歌う。また、トムは、「真夜中に『花婿（the bridegroom）だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした」[20]と聖書にあるように、自分は花婿が来るのを見守る必要があると、言っている。さらに、トムは、「暁に、トランペット響きわたる」と、賛美歌[21]のなかから引用している。

エヴァが死ぬとき、トムは、主人であるオーガスティンの手を、自分の両手のなかに包み込み、いつもそうしてきたように、助けを求めて天を仰ぎみた（二五七、三五〇）。

エヴァの死の直後、第二七章では、オーガスティンとトムの、ながい会話が出てくる。天を見上げても何も見えない、信じたいが信じられないと苦悩するオーガスティンに、トムは、「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした」[22]とつぶやき、それに続けて、オーガスティンに、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」[23]と、主に祈ることを勧める。

次に、主に会ったことがないのに、どうしてキリストがいるとわかるのかと問うオーガスティンに、トムは、「心のなかで主を感じた（[I] felt Him in my soul）」と答える[24]。

最後に、エヴァが読んでくれていた聖書の箇所を、オーガスティンに読んでくれるように、トムがたのむ。その聖書の箇所は、ヨハネによる福音書一一章の、ラザロ復活に関する話だった。

第二八章では、トムは、以前に印を付けていた聖書の箇所を、オーガスティンに読んでもらう。次の箇所が、それである。

人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分ける。[25]

それから、王は左側にいる人たちにも言う。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いていたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ」。すると、彼らも答える。「主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、乾いたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか」。そこで、王は答える。「はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである」。[26]

ここには、トムのキリスト教の特徴の大事な一つの点が明確に示されているといえる。つまり、終末の時が必ずあり、その時は最後の審判の時であり、人は、それまでに、キリストを愛して生きたか、また隣人を愛して生きたか（キリストへの愛と隣人への愛は、実は同一である）[27]、によって裁かれる、ということである。キリストへの愛と隣人への愛が実は同一であるといえるのは、飢えている人、のどが渇いている人、旅人、裸の人、病気の人、牢にいる人はキリストの兄弟であり、そのような人々にした愛はキリストにした愛を意味しているからである。いま一度換言すれば、ここには、「天の故郷」へのあこがれと他者への愛が、トムのキリスト教においては、矛盾することもなく乖離することもなく、結ばれているといえるのである。

死にゆくオーガスティンは、トムに祈ってくれとたのむ。トムは、全身全霊で祈った。死につこうとしている魂のために。それは文字通り激しい叫びと涙で捧げられた祈りだった。

第二九章の最初の部分では、トムは、セント・クレアの死に際して捧げた祈りにおいて、「神の愛の心情といったようなものを感得しえた」と思ったと、言う。つまり、トムの祈りは、「愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます」[28]という聖書のことばのごとくであったと、いえる。

3　レグリー農園でのトム

第三〇章で、トムは、レッド川で綿の大農園を経営するサイモン・レグリーの所有物となった。第三一章で、トムはメソジスト派の賛美歌集（Methodist hymn-book）をもっていることが、わかる。ここで、レグリーに、教会に所属しているのかと問われ、トムは「はい」と答えている。レグリーに、今後は自分がトムの教会であると言われたトムに、「かつてエヴァが読んで聞かせた古い預言書（prophetic scroll）のなかのことばが聞こえてきた」。「恐れるな！　わたしはあなたを贖う（redeem）。わたしはあなたの名を呼ぶ。あなたはわたしのもの！」[29]と。

上陸したレグリー一行は、第三二章で、レグリー農園をめざしていた。購入して所有物となった奴隷たちに、レグリーが歌でも歌えと言うと、トムは、まじめに、メソジスト派の賛美歌を歌い始めた。「エルサレム、しあわせなるわが故郷　永久にいとしきその名！　わが悲しみの終わるとき　汝の喜びは（後略）」と[30]。

レグリー農園に到着後すぐに、トムは、掘立小屋からなる奴隷居住区に連れて行かれた。その夜、心を慰めてくれるものの必要を感じ、トウモロコシを挽く掘立小屋のなかで、トムは、聖書を取り出して、読んだ。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」[31]と。

その後、トムは、自分に割り当てられた小屋へ、よろめくようにして入っていき、眠りについた。その眠りのなかで、夢をみた。夢のなかで、エヴァが、トムのために聖書を読んでいた。「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしは主、あなたの神、イスラエルの聖なる神、あなたの救い主」[32]と。

第三三章では、トムは、「公正なる裁きを行なう神に身をゆだねつつ、宗教的な忍耐強さをもって働き続けようと、心に決めていた」（三〇四、四一二）。トムは、「苦しんでいる仲間［黒人奴隷たち］に、感情の優しさ（a tenderness of feeling）や同情（a commiseration）を表わした」（三〇四、四一二）。その一例が、トムと一緒にレグリー農園に買われてきたルーシー[33]の袋に、自分の袋のなかの綿を、入れてあげたことなどである。レグリーに、ルーシーを鞭打てと言われたトムは、絶対にそうしない、と言う。それに激情したレグリーは、トムの身も心も買ったのは自分だから、自分はトムの主人であると言う。聖書にも、「奴隷たち、おまえの主人に従え（Servants, obey your masters.）」[34]と書いてあるではないかと、言う。それに対して、トムは、自分の魂まで、レグリーは買っていない、魂を買うことなどできない、自分の魂は、自分の魂を守ってくださる方によって、すでに贖われている[35]、と叫んだ。

第三四章は、その場から引きずられていったトムが、綿繰り工場の古い部屋のなかで、肉体的苦痛の限界にまで達するような、のどの渇き（thirst）[36]をおぼえているところから、始まる。苦しみのなかで、トムは祈った。

そのようなところに、キャシーという名前の女が入ってきた。トムは、キャシーに、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」[37]が記されている、イエスの最後の場面の章を読んでほしいと、たのむ。

トムは、キャシーがくれた水を飲み、キャシーに、命の水（living waters）を与えてくださる主のところに行ってほしいと、懇願する[38]。

第三六章で、また、レグリーの鞭打ちにあったトムは、第三三章と同じように、自分の肉体を殺しても、魂（soul）

を殺すことは、レグリーにはできないと、言う。なぜなら、自分は主に頼り、主は自分を助けてくださるからと、トムはレグリーに言う。

第三八章で、再び、レグリーは、第三一章で言ったせりふ、すなわち、「お前の宗教は役に立たないようだ。聖書など火のなかに投げ込んで、俺様の教会に入れ」と言って、トムを足蹴りにした。

そのときのトムを、ストウは、次のように叙述している。

> 神をも恐れぬ残忍な主人のあざけりは、すでに落ち込んでいたトムの魂を、もうこれ以上ない最低のところへまで沈めた。信じようとする彼の手は、まだ永遠の岩にしがみついてはいたが、もはや感覚を失い、絶望的な状態になっていた。トムは火のそばで呆然自失して坐っていた（三三九、四五八―四五九）。

続けて、ストウは、次のように描く。

> 突然、彼のまわりにあったすべてのものが消えていったかのようになり、目の前に、茨の冠をかぶって、殴打され、血を流している人の姿［イエスの姿］が現われた。[39] トムは畏怖と驚きの念をもって、その顔が荘厳なまでに耐え忍ぶさまに見入った。深く悲しそうな目がトムを心の奥底から感動させた。湧き上がる洪水のような感動のほとばしりのなかで、両手を差し出してひざまずいたとき、彼の魂は目覚めた（his soul woke.）。すると、目の前のその幻影が徐々に変化し始めた。茨の鋭い棘が栄光の光線へと変わり、信じられないほどの輝きのなかで、彼はその同じ顔が慈悲深く彼に向かって近づいてくるのを見た。そして、一つの声が聞こえてきた。「勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わた

しの父と共にその玉座に着いたのと同じように」[40]。（中略）そして、［トムは、］自分の意志を、無限の神への絶対的な犠牲（an unquestioning sacrifice）として捧げた（三三九―三四〇、四五九）。

さらに続けて、ストウは次のように叙述する。

夜の静寂のなかに、賛美歌の勝利の言葉が鳴り響いた。[41]

地は雪のように溶け去るだろう、
太陽も輝くことをやめるだろう。
だが、この地上の私に呼びかけた神は、
永遠に私のものとなるだろう。

この限りある命は衰えるだろう、
肉体も感覚も消えさるだろう、
そのとき、天上の私は
喜びと平和に満ちた生を得るだろう。

太陽のように明るく輝きわたりながら、
私たちがそこで一万年の歳月を送ったとしても、

最初に歌い出したときと同じく
私たちは神の頌歌を日々歌い続ける。[42]

トムの目の前に、茨の冠をかぶって、殴打され、血を流している人の姿（イエスの姿）が現われ、その人の茨の鋭い棘が栄光の光線へと変わり、その人の顔が慈悲深くトムに向かって近づいてくるのを、トムが見たときから、トムは変わり始めた。

トムは、美しいテノールの声で、メソジストの賛美歌を歌い始めた。その賛美歌は、第一義的には、「天国の館に入る」こと、すなわち「天の故郷に無事に帰り着く」ことを、願っているが、そのことは「地上」から逃避することではない。「地上」での恐れ、怒り、悩み、哀しみなどに、立ち向かうことさえいとわないと、その賛美歌は述べている。その賛美歌で歌われていることは、とりもなおさずトムの思いでもある。

天国の館（mansions in the skies）に入る許しを
はっきりと私の目で確かめることができれば、
私はすべての恐れを投げ捨てて、
うれし涙にむせぶだろう。

そのときには、たとえこの地上が私の魂に戦いを挑み、
地獄からの矢が放たれようと、
私はサタンの怒りに対してさえ、

面を上げて立ち向かうことができる。

悩みごとが激しい洪水のように押し寄せようと、
悲しみが嵐のように降りかかろうと、
故郷（home）へ無事に帰り着けますようお守りください、
私の神よ、私の天国よ、私のすべてよ。[43]

「天の故郷」へのあこがれとともに、トムの心は、自分のまわりにいる哀れで惨めな人たちに対するあわれみと同情（compassion and sympathy）でいっぱいだった。（中略）彼が神から与えられたあの不思議な平安と喜びの宝庫から、この人たちの苦悩を救えるような何かを注ぎかけたいと願った。（中略）すべての人の重荷を喜んで背負ってやろうとしながら、誰からも助けを求めようとしない、風変わりで、静かで、忍耐強いこの男［トム］が、徐々にまた気づかぬうちに、結局彼ら［トムのまわりにいる哀れで惨めな人たち］に対して不思議な力（a strange power）をもつようになっていった（三四二―三四三、四六二）。

ここにも、トムのキリスト教の特徴が示されているといえる。すなわち、トムのキリスト教は、他者への愛をもち、他者はトムの不思議な力によって変えられていくという、特徴をもっているといえる。トムは、このようなしかたで状況（具体的にいえば、奴隷制）を変えていく。

ある夜、キャシーがトムの小屋に来て、今、ブランデーを飲んで眠っているレグリーを斧で殺してくれるように頼む。しかし、トムは、きっぱりと言う。「あなたのために命を落とされた主のために、そんなふうに尊い魂を悪魔に売

るようなことはしないでください。そんなことからは、悪いことしか生まれないです。主はおらたちに復讐せよとはおっしゃってないです。おらたちは辛抱して、神が定めたそのときがくるのを待っていなくてはならないのです（The Lord hasn't called us to wrath. We must suffer, and wait his time.）。（中略）主よ、どうかあなたのあとに従って、敵をも愛せるようにお導きください（Lord, help us to follow his steps, and love our enemies.）[44]」と（三四四、四六四―四六五）。

キャシーにとって、レグリーを殺すこととレグリーのところから逃げ出して自由になることとは、セットになっていることだった。キャシーは、トムに一緒に逃げてくれるかと問う。キャシーに対するトムの応答は、エメリンと一緒に逃げるように勧めたが、トム自身は、「哀れな人たちと一緒にいて、ともに十字架を背負っていくつもりである（I'll stay with them and bear my cross with them till the end.）」であった（三四五、四六六）。このトムの応答は、第五章において、エライザに対してなした応答と同じである。

これから逃げようとするキャシーに、トムは言った。「ライオンの洞窟からダニエルを救い出されたあのお方[45]、燃え盛る炉から子どもたちを救い出されたあのお方[46]、海の上を歩き風に静まるように命じられたあのお方[47]、主なるあのお方はいまも生きておられます。主があなたを救い出してくださると信じています。やってごらんなさい。あなたのために力の限り祈っています」（三四五、四六六）。

第四〇章は、キャシーとエメリンの逃亡（実際はまだ逃亡しておらず、レグリーの屋敷の屋根裏部屋にいる）が、レグリーを苛立たせるところから始まる。レグリーの苛立ちは、トムを直撃した。トムを連れて来るように命令されたキンボは、レグリーの命令を果たそうと、喜んで出かけていった。キンボが来たとき、綿を摘んでいたトムは、上を見上げて、「わたしの霊を御手にゆだねます！[48] あなたはわたしの罪を贖ってくださいました。ああ、真実の神よ！（Into thy hands I commend my spirit! Thou hast redeemed me, oh Lord God of truth!）」と言った。ここで、祈りの人トムの姿は、同じく祈りの主イエスの姿と重なる。キンボがはげしくつかみかかっても、トムはなされるままにしていた[49]。ま

た、キンボがはげしくののしっても、トムの耳には何も届かなかった。「体を殺すものどもを恐れるな（Fear not them that kill the body.）[50]。そののちは、彼らにできることは何もない」という天の声が、トムには聞こえていたからである。トムには、「天の故郷が目に入ったのである。［トムには、］解放のときがすぐそこまできているという気がした」（三五七、四八三）と、ストウは描いている。

トムに対するレグリーの怒りの発作に、トムは、答えた。「あなた［レグリー］の尊い魂（soul）が救われるのなら、主がおらのためにしてくださったように、いくらでもおらの血を差し上げます。ああ、旦那様！　ご自分の魂に大きな罪をおかさせてはなりません！　そんなことをしたら、おらよりもあなたがもっと傷つくことになります！　あなたがおらにどんなにひどいことをなさっても、おらの苦悩はすぐに終わります。でも旦那様が悔い改め（repent）なければ、あなたの苦悩は永遠に終わらないです！」と（三五八、四八四）。レグリーは、トムを地面に叩き付けた。

そののち、トムは目を開け、レグリーに言った。「あなたにできることは、これ以上はないです。おらは、心からあなたを許します（forgive）」。そう言って、トムは、気を失った。しかし、トムはまだ完全に死んだわけではなかった。「彼の口にした驚くべき言葉や敬虔な祈り（wondrous words and pious prayers）は、残虐行為の手先だった残忍な黒人たち［サンボとキンボ］の心も打った」。トムは、かすかな声で言った。「心からあんたたち［サンボとキンボ］を許す（forgive）！」と。その一人が、イエスとは誰なのか、教えてくれと、トムに尋ねた。その問いが、トムを奮い立たせ、その方の生涯、死、永遠の存在、魂を救済する力について、語った。トムによって、サンボとキンボは、主イエスを信じた（三五九、四八五―四八六）。

このことが起きてからのち、二日間、トムは横になったままだった。そこに、ジョージ・シェルビー（シェルビー家の一人息子）が、トムの居場所を探し出して、彼を連れ戻すべくやってきた。死にゆくトムは、微笑んで（smiled）[51]、言った。「イエス様は死の床に手を加えて羽根枕のように柔らかく整えることができる（Jesus can make a dying-bed

feel soft as downy pillows are.)」[52]。また、ジョージ・シェルビーに向かって、「主を讃えます！（Bless the Lord!）（中略）これで満足して死んでいけます！　おらの魂は、主を讃えます！（Bless the Lord, oh my soul!）」と、告げる。トムを買って（buy）、故郷（home）へ連れ帰るためにきたのだから、死んではいけない、と言うジョージに対して、トムは、「主がおらをお買いになり（bought）、天の故郷（home）へ連れ帰ってくださいます。おらもそこへ行きたいです。天国（heaven）はケンタッキーよりいいところです」と、応える。ここで、ジョージのせりふとトムのせりふの対照的であることに注意せねばならない。ジョージは「この世の故郷」（ケンタッキー）のことを言っているのに対して、トムは「天の故郷」のことを言っているのである。そののち、トムは、「おらはいま、天国の戸口に立って、栄光（glory）のなかに入ろうとしております。（中略）天国がやってきました！（Heaven has come!）（中略）主の御名に栄光あれ！（Glory be to His name!）」と、言った。

さらに、トムは、遺言としての伝言を、ジョージに託す。それは、次のようなものであった。「クロウには、主がいつでもどこでもおらのそばにいて、すべてを明るく楽にしてくださったということを言ってください。子どもたちには、おらのあとに続けと！（Follow me!）旦那様とやさしい奥様、それに屋敷のみんなには、おらの愛を授けてください！（中略）どんなにおらはみんなを愛していたことか！（中略）愛しかないです。ジョージ坊ちゃま！　キリスト教徒であることは、なんと素晴らしいことなのでしょう」（三六二―三六三、四九〇―四九一）。つまり、トムの遺言は、クロウに対してはインマヌエルの神、子どもたちには神への従順（トムを通して）、シェルビー家の人々に対しては他者への愛、ジョージに対してはキリスト者たれ、であった。

このとき、別の世界の到来を告げる、（中略）変化がトムの顔に起こった。「だれが、キリストの愛からおらたちを引き離すことができましょう？（Who shall separate us from the love of Christ?）」[53]と、トムは命が衰弱するのに対抗するような声で言い、そして、微笑みを浮かべながら（with a smile）[54]深い眠りについた（三六三、四九一）。

トムの最後は、ストウによって次のように描かれている。

われわれの友の最後の安息の地を示す記念碑はない。彼にはそんなものは必要ないのだ！　主は、彼がどこに横たわっているかご存知だし[55]、彼を不死のものとして天に召し、彼が栄光に包まれて姿を現わすとき、［主も］彼とともに姿を現わされるであろう（三六五、四九三）。

トムを哀れまないでほしい！　トムのような生と死は、哀れまれるべきものではない！　神の最高の栄光は、無限の富にあるのではなく、自己を犠牲にして苦難に耐える愛（self-denying, suffering love）[56]にある！（三六五、四九三―四九四）。

もし、ストーリーが、ここで終わっていたならば、トンプキンズや小林が言うごとく、『アンクル・トムの小屋』は、「キリスト磔刑の物語」であると言ってしまってもよいが、次の部分が続いていることによって、『アンクル・トムの小屋』は、「キリスト磔刑の物語」に、「奴隷制」がなくなるようにとのストウの願いが込められていると言うのが正しいのではないか。ストーリーは、次のように続く。

トムを丁重に弔ってから、ケンタッキーの農園に戻ったジョージは、農園の黒人奴隷たちに、次のように言う。「『アンクル・トムの小屋』を見るたびに自分の自由（freedom）［奴隷から解放されて自由な黒人になったこと］について考えてくれ。あの小屋を一つの記念碑としてみんなの心にとどめ、彼に見習い（follow）、彼のように正直で、誠実なキリスト教徒（Christian）になってくれ」と（三八〇、五一五）。

Ⅲ　トムのキリスト教の特徴

トムのキリスト教の特徴として指摘できることは、第一に、トムがメソジストとして設定されていることである。たとえば、第二二章において、トムは、よく知られているメソジストの賛美歌を歌っている。第三一章では、トムは、メソジスト派の賛美歌集をもっている。第三二章では、トムは、メソジスト派の賛美歌を歌っている。第三八章では、トムは、美しいテノールの声で、メソジストの賛美歌を歌い始めている。

しかし、トムがメソジストとして設定されているとしても、上述のことから容易にわかることは、シェルビー農園でのトムがメソジストであるかどうかはわからないことである。トムがメソジストであるとはっきりわかるのは、オーガスティン・セント・クレア家に移った後からである。

また、トムがメソジストとして設定されているといっても、トムがメソジストの「教義」を信じているという理由からではなく、トムがメソジストの賛美歌をもっていたり、あるいはメソジストの賛美歌を歌ったりしているからである。つまり、トムがメソジストであることは、メソジストの賛美歌と結びついている。この点で、宮城妙子の「アンクル・トムをメソジストとして描いたストウの戦略」は、メソジストの「教義」を強調しすぎていて、『アンクル・トムの小屋』の読みの正確さと公平さを欠いているといわざるをえない。[57]

トムのキリスト教の特徴として指摘できる第二は、トムが「祈りの人」として描かれていることである。たとえば、第四章の集会では、トムは、説教において優れていたが、特に優れていたのは祈りにおいてであったと、紹介されている。第一四章では、奴隷商人ヘイリーからでさえ、トムは、祈りの人間として、紹介されている。第一六章では、オー

ガスティンが、トムを、自分（オーガスティン）のために祈ってくれており、特に自分の回心のために祈ってくれていると、紹介している。第二六章では、トムは、主に祈ることを、オーガスティンに勧めている。第二八章では、死にゆくオーガスティンから祈ってくれとたのまれたトムは、全身全霊で祈っている。第二九章では、トムの祈りは、「愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまる」という聖書のことばのごとくであったと、ストウをして言わしめている。第三四章で、トムは、肉体的苦痛の限界にまで達するような苦しみのなかで、神に祈っている。第三八章では、レグリーのところから逃げるキャシーに対して、トムは、力の限り祈ることを、約束している。

以上の、トムの祈りをみれば、彼の祈りの特徴は、ほとんどの場合、他の人のために祈っていることである。

第三に、トムのキリスト教の特徴として指摘できることは、トムが「天の故郷へのあこがれ」をもった人として描かれていることである。たとえば、第四章の集会において、キャンプ・ミーティングでの歌のなかから、天の故郷をあこがれる歌が選ばれており、聖書朗読の箇所として黙示録が選ばれている。第一二章において、トムが奴隷商人ヘイリーの馬車に乗せられている時に、彼は、天の故郷へのあこがれを内容とする聖書の言葉に思いをはせている。第一四章でも、ミシシッピー川を下っている船のなかで、第一二章と同じように、トムは、天の故郷へのあこがれを示す聖書を読んでいる。第一六章において、第四章の集会と同じように、トムは、天の故郷をあこがれる歌を歌っている。第二二章において、トムは、天の故郷へのあこがれを示す霊歌を歌っている。

以上だけをみれば、トムは、天の故郷だけをあこがれており、地のこと（具体的には奴隷制のこと）には関心がないようにみえるかもしれないが、決してそうではない。トムの場合、天の故郷をあこがれることと、地において他者を愛すること（他者を愛することによって、実は奴隷制を変えていく）が、矛盾することなくまた乖離することなく、結びついているのである。これが、トムのキリスト教の特徴の第四として、指摘できる点である。すなわち、トムは、「他者への愛をもった人」として、描かれている。たとえば、第三三章で、トムは、苦しんでいる黒人奴隷の仲間たちに、

感情の優しさや同情を表わしている。第三八章では、トムの心は、自分のまわりにいる哀れで惨めな人たちに対するあわれみと同情でいっぱいになっている。また、トムのまわりにいる哀れで惨めな人たちは、トムの不思議な力によって変えられていっている。つまり、トムは、このようなしかたで黒人奴隷たちの状況（具体的にいえば、奴隷制）を、徐々にそして気づかぬうちに、変えていっているといえる。このことは、「同情と［思いやりの］感情」という、一見したところ頼りない印象を与えかねない回路を経由して、奴隷制を廃止しようと、ストウが思っていたということを、「はじめに」で述べたことと、符号している。

トムのキリスト教の特徴の第三と第四が結びついていること、すなわち、トムが天の故郷へのあこがれをもっていると同時に、他者への愛をもっていることは、第二八章において、トム（ストウといってもよい）が、マタイによる福音書三一―四五節（天の故郷に入ることができるかどうかは、他者への愛によって、決められる）をオーガスティンに読んでほしいと願っていることからも、理解できる。

その点において、野口啓子が、「『アンクル・トムの小屋』の政治的感化力とキリスト教」において、「ストウ［トムといってもよい］の究極の救済は、つまるところ、あの世における清算であったといえよう」[58]と記しているのは、トムに対して、微妙であるが、公平さを欠くといわざるをえない。なぜならば、トムは、地において他者を愛することを通して、地の問題（具体的には奴隷制）を徐々にまた気づかぬうちに変えていっている人間としても、描かれているからである。

Ⅳ　おわりに――今後の課題として――

トムのキリスト教の特徴の一つとして、これまでのところで、トムがメソジストとして設定されていることであると、指摘した。それにしても、ストウは、『アンクル・トムの小屋』という小説の主人公とみなされてよいトムを、「なぜ」メソジストとして設定したのだろうか。その理由の一つは、アンクル・トムのモデルとなったといわれているジョサイア・ヘンソン（Josiah Henson）が、メソジストの信仰（Methodist faith）をもっていたからかもしれない。[59] あるいは、ストウ自身、「メソジストの牧師」「老メソジスト」「メソジストの用語」などの表現を知らないわけではなかったという理由をあげることができるかもしれない。[60] しかし、そういうことでは、理由としては弱すぎる。事実、彼女自身、その生涯においてメソジストとの交流はほとんどなかったというほうが正しいのではないか。「アンクル・トムをメソジストとして描いたストウの戦略」の論文を書いた宮城も、ストウとメソジズムとの出会いを検証できていない。そうであるとするならば、『アンクル・トムの小屋』において、「なぜ」ストウがトムをメソジストとして設定したのか、その理由はまだ解明されていない、といわねばならない。

『アンクル・トムの小屋』の訳者の一人である大橋吉之輔は、その「解説」において、「マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの非暴力による公民権運動は、トムの精神を改革運動の戦術面に拡大したものである」と言っている。[61] トムの精神を、キングは、運動体にまで拡充したといってよいであろう。トムの精神を、キングは、運動体の中心に保ちながら、トムにはできなかった運動にまでなしていったといってよいであろう。今後、トムの精神とキングの思想の密接なつながりを究めるとともに、トムとキングの違いは何であったのかを究めることも、課題の一つとなるであろう。

注

（1）第一次逃亡奴隷法と第二次逃亡奴隷法についての筆者の説明は、高野フミ編の『「アンクル・トムの小屋」を読む――反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃――』のなかの板橋好枝による論文「『アンクル・トムの小屋』の文学性――奴隷制社会の言説――」六一頁を参考にした。

（2）英語テキストは、Elizabeth Ammons 編の *Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly* を用いる。日本語訳は、主として、一九九八年に明石書店から出版された小林憲二監訳を用いる。しかし、場合によって、拙訳を用いている部分もあるし、一九六七年に旺文社文庫として出版された大橋吉之輔訳、一九六六年に角川文庫として出版された山屋三郎・大久保博訳、一九五二年に新潮社文庫として出版された吉田健一訳を用いている部分もある。引用は、本文中に、英語の頁数と日本語訳の頁数の順序で示す。訳者名を特に明記していない場合は、小林監訳である。

（3）Charles Edward Stowe, *Life of Harriet Beecher Stowe: Compiled from Her Letters and Journals* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1891), 146; チャールズ・エドワード・ストウ『ストウ夫人の肖像――その手記による伝記――』鈴木茂々子訳、ヨルダン社、一九八四年、一六五頁。

（4）Joshua D. Bellin, "Up to Heaven's Gate, Down in Earth's Dust," in *Harriet Beecher Stowe's Uncle Tom's Cabin: A Casebook*, ed. Elizabeth Ammons (Oxford: Oxford University Press, 2007), 207–26. なお、「『アンクル・トムの小屋』の著作権を神に帰す」という表現は、『「アンクル・トムの小屋」を読む――反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃』のなかの野口啓子による論文「『アンクル・トムの小屋』の政治的感化力とキリスト教」六五頁から借用した。

（5）Jane P. Tompkins, "Sentimental Power: *Uncle Tom's Cabin* and the Politics of Literary History," in *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*, ed. Elaine Showalter (New York: Pantheon Books, 1985), 91; ジェイン・P・トンプキンズ「感傷の力――『アンクル・トムの小屋』と文学史の政治学――」『新フェミニズム批評――女性・文学・理論――』

青山誠子訳、岩波書店、九九―一〇〇頁。

(6) 小林憲二「『アンクル・トムの小屋』の再評価と位置付け」『アンクル・トムの小屋』小林憲二監訳、明石書店、一九九八年、五七三頁。

(7) ストウの父は、アメリカでも有名な牧師のライマン・ビーチャー（Lyman Beecher, 1775–1863）であり、ビーチャー家は、一九世紀アメリカのキリスト教を牽引した。ストウやビーチャー家に関しては、次の著書が参考になる。Joan D. Hedrick, *Harriet Beecher Stowe: A Life* (Oxford: Oxford University Press, 1994). Milton Rugoff, *The Beechers: An American Family in the Nineteenth Century* (New York: Harper & Row, Publishers, 1981).

(8) 小林監訳では「まっとうな感覚をもつ」となっているが、大橋訳では「正義の感覚によく注意する」となっており、山屋・大久保訳では「正しく感じる」となっている。筆者は、小林監訳は意訳しすぎであり、山屋・大久保訳が適訳ではないかと思っている。

(9) 上杉忍は、その著『アメリカ黒人の歴史――奴隷貿易からオバマ大統領まで』（中公新書、二〇一三年）の四八頁において、「ハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』は、黒人奴隷制の非人間性を広く北部の白人社会に知らせ、世論を変える大きな力となった」と、記している。

(10) キャンプ・ミーティングについての筆者の説明は、大宮有博による『アメリカのキリスト教がわかる――ピューリタンからブッシュまで――』の七七―七八頁を参考にした。

(11) 日没から夜明けまでの「見えざる教会」については、G・P・ローウィック著、西川進訳の『日没から夜明けまで――アメリカ黒人奴隷制の社会史――』（刀水書房、一九八六年）が詳しい。

(12) 藤井久仁子「『アンクル・トムの小屋』と家庭小説」『「アンクル・トムの小屋」を読む――反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃――』高野フミ編、彩流社、二〇〇七年、一五六頁。

(13) 前半はヘブライ人への手紙一三章一四節である。『新共同訳　新約聖書注解　II』によれば、「これはいわば黙示文学的信仰告白とでもいうべきものである。キリスト者はこの世から逃避してはならない。しかし同時に、その究極の目標が『この地上に永続する都』ではなく、すでに天に備えられている『来るべき都』であることを心得ることが求められる」（日本基督教団出版局、一九九一年）、三八九頁。

(14) ヨハネによる福音書一四章一―二節。『新共同訳　新約聖書注解　Ⅰ』によれば、「父がいる天において、弟子たちの『住む所』を用意するということである。（中略）神から派遣され天に帰って行くイエスは、弟子たちのために（中略）天に住居と場所を用意し、彼らをも父と子の交わりに入れようとされるのである」（日本基督教団出版局、一九九一年）、五〇二―五〇三頁。

(15) 小林監訳、大橋訳、山屋・大久保訳、吉田訳では、「牧師」となっている。ここでは「説教師」が正しい。

(16) フィリピの信徒への手紙四章一一節。『新共同訳　新約聖書注解　Ⅱ』によれば、どんなときにもどんな場合にも、暮らしや食物や所有物の面での豊かさと乏しさに対処していくことができるようになった、と解している（二五一頁）。

(17) なぜエヴァが黙示録と預言書を気に入ったかの説明を、ストウはしていない。

(18) ヨハネの黙示録一五章二節。

(19) このメソジストの賛美歌は、ヨハネの黙示録七章九節に基づいている。『新共同訳　新約聖書注解　Ⅱ』によれば、ヨハネの黙示録七章九節は、「数えきれないほどの殉教者たちが、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち（白い衣もなつめやしの枝も、勝利や賛美の形容である）、玉座の前と小羊の前に立っている」という意味である（五〇七頁）。

(20) マタイによる福音書二五章一―一三節。花婿とは、主のことである。

(21) この賛美歌は、出典不明である。

(22) マタイによる福音書一一章二五―二六節。『新共同訳　新約聖書注解　Ⅰ』によれば、マタイによる福音書一一章二五―二六節は、「啓示を与えた父への感謝の祈り」である。「これらのこと」が何を指しているのかは、不明である（八六頁）。

(23) マルコによる福音書九章二四節。『新共同訳　新約聖書注解　Ⅰ』によれば、二四節の叫びは、「信じきることのできない絶望的状況にある者がなおイエスの助けによって真に信じる者とされることを願う信仰の叫びである」（二〇九―二一〇頁）。

(24) ここで、feel という表現になっていることに、注意しなければならない。feel や feeling は、ストウのキリスト教の特徴、したがってトムのキリスト教の特徴、でもある。

(25) マタイによる福音書二五章三一―三二節。羊飼いがするように、人の子によって、すべての民族が選別される、という意味である。

(26) マタイによる福音書二五章四一―四五節。ここでは、裁きの主体は、王である。
(27) 宮内彰「マタイによる福音書」『増訂新版　新訳聖書略解』山谷省吾・高柳伊三郎・小川治郎編（日本基督教団出版局、一九七九年）、九五頁。
(28) ヨハネの手紙一　四章一六節。
(29) イザヤ書四三章一節。「贖う（redeem）」という語は、レグリー農園でのトムのせりふのなかで、鍵となる重要な表現である、といえる。
(30) テキストでは、次のようになっている。“Jerusalem, my happy home, Name ever dear to me! When shall my sorrows have an end, Thy joys when shall―”小林監訳では、「ここで歌われているメソジスト派の賛美歌は、『聖母マリアの歌』（一六〇一年）の一部分である」との説明が、なされている。大橋訳では、「一六世紀後半より『聖スティーヴン』の曲に合わせて歌われている。歌詞は聖オーガスティンの『黙想』」との説明が、なされている。山屋・大久保訳では、「一六世紀の末ごろ賛美歌として歌われだしたもので、歌詞は聖アウグスチヌスの『黙想録』からとったものと言われる」との説明が、なされている。
(31) マタイによる福音書一一章二八節。
(32) イザヤ書四三章二―三節。
(33) 子どもが四人いたメソジスト教会員のムラトー（黒人の血が半分入っている）の女性である。第三一章を参照のこと。
(34) コロサイの信徒への手紙三章二二節。
(35) ここにも、「贖われる」という表現がなされている。ここでは、buy and pay for の受動態が使われている。
(36) トムの「のどの渇き」に関しては、ヨハネによる福音書一九章二八節の、イエスの「渇き」を想起のこと。「この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渇く』と言われた」。
(37) ルカによる福音書二三章三四節。これは、十字架上のイエスの七言の第一言である。『新約聖書略解　増訂新版』によれば、これは、「自分を殺す者のためのとりなしの祈りであり、かつて自ら言われたことを文字どおりおこなわれた。肉体においてのイエスは苦しみにさいなまれておられたが、霊においては自由であり、全き信頼を崩さず『父よ』と呼びかけられた」（日本基督教団出版局、一九七九年）、二四八頁。

(38) ここで、人間が与える「水（water）」と、主イエスのみが与えることができる「命の水（living water）」との対比に注意のこと。
(39) マタイによる福音書二七章二九―三一節、マルコによる福音書一五章一七―二〇節、ヨハネによる福音書一九章一―三節を参照のこと。
(40) ヨハネの黙示録三章二一節。これは、勝利を得る者に対する約束の言葉である。
(41) この賛美歌における勝利の言葉は、各スタンザの後半の部分に示されているといえよう。
(42) この賛美歌は、ジョン・ニュートン（John Newton, 1725–1807）のアメイジング・グレイスである。
(43) この賛美歌は、アイザック・ワッツ（Isaac Watts, 1674–1748）作の『賛美歌と霊歌（*Hymns and Spiritual Songs*）』第二巻に入っている六五の「わが帰路に」である。南北戦争前の南部の歌集本に多く掲載されている。
(44) マタイによる福音書五章四三―四四節。
(45) ダニエル書六章二四節。
(46) ダニエル書三章一九―二八節。
(47) マタイによる福音書一四章二五―三二節およびルカによる福音書八章二四節。
(48) ルカによる福音書二三章四六節。『新約聖書略解　増訂新版』は、「イエスは、祈りをもって公生涯を始められ、祈りをもって地上を歩み、四六節の祈りをもって世を去って、神のもとに帰られた、とルカは記している」（二四八頁）と、説明している。
(49) イエスの最後が、ここで想起される。
(50) マタイによる福音書一〇章二八節。『新約聖書略解　増訂新版』では、「悪人や悪魔は、『からだを殺しても、魂を殺すことはできない』。かような者を恐れなくてもよい」との、説明がなされている（五二頁）。
(51) 「微笑む」という語は、トムという人間をあらわすキー・ワードの一つである。
(52) 黒人霊歌に、これと似た表現がある。
(53) ローマの信徒への手紙八章三五節。
(54) ここでも、「微笑む」という語が使われていることに、注意のこと。

(55) ストウは、第四一章においてトムの最後を描いているが、第四〇章のプロローグにおいても、アメリカの詩人であり編集者のウィリアム・カレン・ブライアント（William Cullen Bryant, 1794–1878）のことばを借りて、同じことを記している。それは、次のごとくである。「心正しき者が天から忘れられることはない！（中略）たとえ心は押しつぶされ、血を流し、人に顧みられず、死んでいこうとも！なぜなら、神はすべての悲しみの日々を記録し、すべての苦い涙を数えていてくださるからだ」。

(56) 小林監訳、大橋訳、吉田訳では、「自己を犠牲にして苦難に耐える愛」となっている。山屋・大久保訳だけが、「己れを捨て、人のために苦しむ悩む愛」となっている。

(57) 宮城妙子「アンクル・トムをメソジストとして描いたストウの戦略」『英文学思潮』七九巻、青山学院大学英文学会、二〇〇六年、二〇一—二一七頁。

(58) 野口啓子「『アンクル・トムの小屋』の政治的感化力とキリスト教」『「アンクル・トムの小屋」を読む——反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃——』高野フミ編、彩流社、二〇〇七年、七七頁。

(59) David S. Reynolds, *Mightier than the Sword: Uncle Tom's Cabin and the Battle for America* (New York: W. W. Norton & Company, 2011), 105.

(60) Charles Edward Stowe, 50, 61, 63; 鈴木訳、五七頁、七一頁、七三頁。

(61) 大橋吉之輔「解説」『アンクル・トムの小屋（下）』旺文社（旺文社文庫）、一九六七年、四五七頁。